蘇軾における「東坡」の意味

正木，佐枝子
九州大学：非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9661

出版情報：中国文学論集. 25, pp.55-72, 1996-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：
宋代の文人蘇軾は、筆者事件である『烏台詩案』によって、元豐三年（一〇八〇年）、齢四十五にして黄州に流
謫された。その処遇は『蘇軾公啟』に見る範を含め、検校尚書水部員外郎を責授され、黄州團練副使に充てられ、
公事に絞るを得ず。である。すなわち、一見すると体裁の良い職を与えられたようだが、その実は、蘇軾は
黄州から出られず、公文書に署名できない、つまり行動の自由と政治的権力の剥奪されたのである。

蘇軾の友人は、蘇軾の日日日に困窮の度を増すのを見かねて荒れ地を借り受け、蘇軾が耕作できるように取り
計らった。そこで蘇軾はその借地に『東坡』と名づけて耕作を始め、有名な『東坡八首』（以下『東坡八首』
と略称）の詩を詠んだ。またその翌年、蘇軾は在家仏教徒の表明である『東坡居士』と自ら称するように
してその翌年に取り入れた。こので蘇軾が用いた『東坡』については、従来、白居易の『東坡に花を植え』等の詩に由来し、蘇軾が白
居易の文学を敬慕した表れだと考えられてきた。しかし筆者は、白居易の『東坡八首』を単に文学上の思いに
止まらず、政治上の思いをも含むと考えるに至った。そこを本稿では、まず蘇軾における『東坡八首』
の意味について再検討し、さらにその意味と、蘇軾の『東坡居士』の名号や『東坡八首』詩の内容が、い
かに関連するか述べみたい。

蘇軾における『東坡』の意味（正木）
らず、蘇軾における「東坡」の意味について、従来の説の出所を確かめておく。これは南宋・周必大的意見に始まるようである。その言とは以下の通りである。

白樂天、忠州刺史に選ばれたとき、「東坡に花を種う」二詩に見る。又「東坡に歩む詩有りて云ふ「朝に東坡に上りて歩み、夕に東坡に到らんと」と、東坡の何を愛するところ、此の新たに樹に成りぬるを愛す」と。本朝の蘇文忠公軽がるしく許可せず、蘇軾をのみ敬愛し、蘇軾の詩を吟味し、人に情有り、物に著く無く、大略相ひ似る。黄州に謳居し、始めて東坡と号す。其の詩は必ず東坡の作に起る。二老堂詩話『東坡立名條』

このように周必大は、「白居易が東坡を愛していたこと、蘇軾はただ白居易だけを敬愛し、その詩にかししば白居易の詩を取り入れており、その文学は白居易と似た面を持つこと」を述べ、『蘇軾が『東坡居士』と名号したのは白居易の詩に由来するべきと考えるのである。この説は今日まで疑われることなく信奉され、例えば、小川環樹・山本和義選訳『蘇軾詩選』においても、同様の見解を採っている。但し、蘇軾自身は、「東坡」の命名の由来については何も語っていない。

では以下に、白居易の詩のうち「東坡」の語が使われるものと、其の詩を書いた時の白居易の官位から、考察を始める。白居易は元和十年（八一五年）越巻の責めによって江州司馬に謫せられた。にかく謫地の江州から脱出したときと願って実現した地方官であったが、忠州は、江州より都に近いとはいえ、謫居には遠いなら、白居易は自らの境遇を嘆くこともあった。城東の堤をななわち東坡に花數を植えた
このことは、その消憂のためだったであろう。

ここでは、注目に値するのは、これらの詩のうちに、単なる植え花や消憂以外の心情が現われていることである。まず

『東坡に花を種う』其二詩では、

養樹既に此、養民亦何殊。

一葉語を述べ、此の如し、民を養ぶも亦た何ぞ殊ならぬ。このように、白居易の治政への意欲を表わしているのである。次に、「東坡に種ゑし花樹に別る」一詩は、忠州に別れを告げ、尚書司門員外郎として朝廷に返り咲こうとして詠んだものである。其一詩にいう、

二年留滞在江城、草樹禽魚盡有情。

二年滞留して江城に在り、草樹禽魚、盡く情あり。著者の詩は、「東坡」の文字が登場する時、読者は、白居易の政治的不遇の消憂や政治への意欲を示し、本当に百六十余年であるから、白居易の「東坡」に対する思いを一度に知ることができる。蘇軾は、白居易に後れて生まれる

蘇軾が日頃白居易の文学を敬慕していたのは確かなある。しかしここで蘇軾が「東坡」を用いて命名した所以

『東坡』に花を種う　其二詩

 написанного текста.
この書簡の宛名は、文路公さなわち文彦博であり、元豊年間に西京の大尉留守を務めた権貴の者である。もともと文彦博は枢密副使、参知政事を務める中央の官僚であったが、王安石に対立して地方官を歴任し、一身は外に在るといえども、帝都の加ふる有り」という。文中に「当世の偉人でなければ託すべきことはできない。託すべきでなければ、あたしだ」というのは、王安石に対立した文彦博の経歴に、蘇軾自身のそれを探っているのであろう。文簡はその文彦博から書簡を受けて取ることはできない、託すべきでなければ、あたしだ。
そして蘇軾はおもに士大夫として生きようとし、しかも自分が士大夫として生きていることを他人に知ってほしいと願い、儒教経典に注釈を施して、わざわざ中央の官吏にそれを送り、その態度を表明しようととしたのである。な

次に、筆者が蘇軾の『東坡』の名作には朝廷復帰願望があると考える第二の理由は、蘇軾が黄州を去って二年後に、翰林院学士に任じられ、蘇軾自ら『経歴的に自分は自居易よく似ているからである。それは以下の詩である。

蘭苑を去り春夏を以て、邁英に侍立し、而して秋冬の交に、子由相り従じき入侍す。絶句四首に次願し、各々懐

蘇軾は詩中の『鉄石心』を黄州時期の書簡の中でも使っている。すなわち、蘇軾の友人李公抗が蘇軾の貶謫を慰め

を、そのように返書したのである。私は鉄や石のような堅い心であろうたに接しているのに、あなたは

で、蘇軾は次のように述べる。公自注（前略）、蘇軾は自居易と自分の経歴をそれぞれ述べる。出處と老少、大略相ひ似る、庶幾は便復た此

の翁の晩節の閑適の楽を享くことを。

蘇軾は詩中の『鉄石心』を黄州時期の書簡の中でも使っている。すなわち、蘇軾の友人李公抗が蘇軾の貶謫を慰め

の機会がきたら、捨て身で働く道（道理）も忠義も心得ている。もし皇帝や人民のために何かすることがあれば、蘇軾は前掲の詩で『貶謫されても道理と忠義の固い

する機会がきたら。捨て身で働く道（道理）も忠義も心得ている。もし皇帝や人民のために何かす

を、そのように返書したのである。私は鉄や石のような堅い心であろうたに接しているのに、あなたは

の機会がきたら。捨て身で働く道（道理）も忠義も心得ている。もし皇帝や人民のために何かす
得て、官吏として一生を貫こうたいとは願うのである。

以上のように蘇軾には、貧賤されてもあくまで士大夫としての生き方を貫こうたいという、並々ながら儒教思
想がある。そして白居易の経歴に自分のそれと重ね、晩年の関連の楽しみをも得たいと願ったのであった。そこで

では、蘇軾はなぜ仏教の在家信徒の表明である「居士」と称したのであろうか。ここでは、「居士」名に「東坡」
を付したことではない。「居士」と称したこと自身に重点をおいて論じることにする。すなわち、蘇軾の黄州流謫
時期における宗教への傾倒を、従来の研究結果を踏まえながら略述し、その疑問点も述べよう。

蘇軾は、今回罪を犯したことを自ら反省し、自己の生き方の枝葉末節をどんなに改めても、根本を改めないことに
は、何度でも同じ失敗を繰り返すと考えた。そこで城南の安国寺には繙く通り、新たな生き方を模索し、「身心皆
な空」すなわち「悟り」の境地にまでいったといえる。深く自ら省察すれば、則に物相を忘れ、身心皆な空にして、
罪垢の從って生ずる所を求むるを得べからず。

また蘇軾は道教にも興味を示した。元豊三年、すなわち、黄州に到着した年の暮れに道觀に籠った。ここは思索す
るより、養生のためであったようである。注目に値するのは、蘇軾が、これらの安国寺通い、道觀籠りのいずれも
から、その思想を積極的に取り入れようとしていることである。つまりこれは、前述のように儒教経典に注釈をし

— 60 —
士大夫としての態度を表し、後述のように自重を表現したわりに公的立場を維持しつつ、それに伴う緊張
状態を和らげ、精神の均衡を保ち、身心の疲労を防ぎ、日々を送り過ごすため、私の立場において積極的にとっ
た手法といえよう。

六客とは、蘇軾及び詩題にある要素すなわち楊経の共通の友人達であり、この時或る者は既に没し、或る者は遠方
にいる。そこでこの詩句の内容は「友人達の存亡をもって、六人の友人を悲しむせて、去れ給え、私はすでに地
獄も天宮に等しい悟りの境地にいるのだから」ということである。この「地獄も天宮に等しい」とは、仏教経典
に見えるように、「一念仏する男子はついに覚り、地獄も天宮も皆な浄土になって感じる」という境地に他なら
ない。

蘇軾の弟蘇轍は、蘇軾の文学は黄州に譲居してから一変し、とても自分には及びもつかないものとなった。

以上のこと考えあわせると、「居士」を称したからには、蘇軾に宗教上の変化があったのだと考えるのは、自然

蘇軾における「東坡」の意味（正亨）
である。

しかし同時に、この考えて文献上不確かな面を持つことも明かにしておかななければならない。

苏軾はこの時期に「居士」と称すと明言していないことである。「東坡居士」と称したとは、前掲の蘇軾の記した墓志銘に従っている。なぜ蘇軾が仏教に傾倒し、悟りの境地に至ったことを、前掲の「黄州安国寺記」に根拠を求め、また従来の研究では、蘇軾が仏教に傾倒し、悟りの境地に至ったことを、前掲の「居士」と称すと明言していないことである。「東坡居士」と称したとは、前掲の蘇軾の記した墓志銘に従っている。

七band、余將に汝への行に臨むあらむとす。連曰く、「寺には未だ記有らず」。石を具へ之に記さむことを請へり。余辞するを得ざりき。

つまり、この記は蘇軾が自発的に書いたものではなく、安国寺の僧院に委託されて書いたものである。そのような場合、仮に蘇軾が寺で何も得ることのなかかったとしても、それを率直に告白できるであろう。寺で一身心皆空になったと述べるのには、多少の誇張が含まれていないだろう。この記をもって蘇軾が仏教の信仰を深めたと考えるのは、早計にすぎるだろう。
三

ではここで観点を変え、宋代朝の仏・道教政策について考えてみた。既に知られているように、宋代朝は
その建国時期から積極的に仏教と道教を治政に取り入れた。それは勿論、儒教を主体とし、国家がうまく治まるよ

例えば出版物からそれを見つけると、主なものを拾っただけでも、宋代朝は、太祖開宝四年（九七一年）に仏
典の集大成である『大藏経』を出版した。また太宗は首都汴京や蘇州に道観を建立し、真宗天禧三年（一〇一九年）に仏
藏経である『大宋天宮宝藏』七巻を成した。これらの皆は国家事業の成果である。

また、詔令によって政策の動きをみる。太祖は、『禁寄禪與書詔』（勝手に仏道にあってはならない）や『限
度僧尼詔』（僧や尼になるには、年ごとにその数を限る）などを発布し、道士や僧侶の制度の大まかな枠組みを
定めた。三代目の皇帝真宗になると、『召河陽濟源道士蘭栖真詔』（道士を宮中に招き、話をさせる）や『特度僧
詔』（寺や道観にいる少年で、まだ得度していない者が、試験をして寺では百人の中のうち二人を、道観では百人の
うち一人を、得度させるる。『以太宗御製秘集編入佛經大藏詔』（太宗の文集を、『大藏経』の中に編入する）より細か
な内容の詔令を発布している。これらの詔令の後に仏・道教関係の詔令を発しているのは、道教趣味で知
られる八代目の皇帝徽宗である。そうすると太祖から三代目の皇帝真宗までの間に、宋代朝の仏・道教政策は、
その基礎が固まったといえよう。

結論に、蘇軾は、このような仏・道教を有効的に利用しようとする政策の下に、活動していた士大夫だったの
である。蘇軾が日頃その感化を多分に受けしていていなかったとは想像に難くない。前記のように、蘇軾が罪を得た

苏軾における「東坡」の意味（正木）
中国文学論集
第二十五号

たとえ福祉・社会の安定を得たいという願って民衆に接近したようすには一理ある。しかし、その精神的欲求が
自己の欲を含み得るのではなくかと思うのである。

に到るに、一つの政治の見解を再考してみよう。すなわち、蘇軒が「居士」と称したのは
は、蘇軒が「居士」の名号であるから、真に帰依したという詩が詠みにくいのであろう。次に、寺の僧と親し
くしてこの寺の記を書いたことは、政府や皇帝に対する自己防衛や宣伝に寄与する。さらに、施主に詠んだ詩がない
ではない。それに、以下に蘇軒の書簡を紹介する。

習慣に従う蘇軒は、自らの居所のごとくして日を

顔し、自重しているがを印象づけるようとした。そこに、党争に巻き込まれて罪を犯すたも、いかに生き抜くかを知っ
ている、蘇軒のしたたかな姿勢が観られるのである。

四

以上述べてきたように、筆者は、蘇軒が借地名と居士名に「東坡」を名乗ったのは、白居易の文学を敬慕した
ことにより、特別な思い入れ、すなわち朝廷復帰願望があると考える。そこで本章では、蘇軾が黄州流謫時期に
詠んだ。有名な「東坡八首」詩の内容と、このことがいかに関わるかを考察してみたい。

まず「東坡八首」詩の読解から始めよう。思うに「東坡八首」詩の最大の特徴は、蘇軾がその創作を通じて、苦
悩から希望へと一大転機を迎えることにある。そこで、該詩の叙文の内容についてみてみよう。

余、黄州に至りて二年、日々以て困窮す。故人王正卿
余の食に乏しきを哀れみて、為に郡中に於いて故営地
すれぱ、隠鬱の劣、筋力、殆ど尽きぬ。末を釋て欲し、乃ち是の詩を作り、「自ら其の勤を励む、歴幾は熱'

すなわち、①制作年代は、黄州に到着してから三年目、故人王正卿
人の顧みることもなく、顏量
滿つ。②当地では日々の生活が困窮していっ
た、③友人馬正卿が兵営の跡地を借り受けたが、④借地は荒れ放題であったが、蘇軾自ら耕作し、来秋の収穫
を願っていること、が分かる。次に、紙幅の制限により、八首のうち其の一、七、八を掲げ、その他は大意を紹介
する。

其一

1 廃壇無人顧
2 颜量滿蓬蒿
3 獨有孤旅人
4 天窮無所逃
5 獨り孤旅の人有り、天
6 略せしめて逃る所無し

9 崎嶇草棘中、10 欲徳一寸毛

端に来りて瓦礫を拾ふべきものを、裁

りて土膏ならば。
土地の高低によって耕作に適した作物がある。近隣の蜀人が桑の実を分けてくれる。そのうち、ケシを築こう。

其三

早魃のため秋も涸れ果て耕作が困難であったが、昨夜雨が降り、泥の中には芹が芽を咲かに出してすぐに、

其四

清明節前に稲の種を蒔く。やがて春には苗が芽生え、夏には葉先が風に翻り、秋には実りがある。く

其五

畑の地方からいうば、ここが十年荒あれだったのはむしろ幸いであった。桑の木はまだ大きくならないが、麦

其六

や松の収穫は十年以上も先のことだが、私の計画はただひたすら。かつての同僚が三寸もの大蜜柑を届けて

下さったが、この苗が手に入らないのか。私はもうその実がなるのを想像する。

其七

1 潘子久不調
2 汲酒江南村
3 郭生本将種
4 響楽西市垣
5 古生亦好事
6 恐は足れ押牙の孫ならむ
7 家に一畝の竹有り、時無く門を叩くを容す
9 我窮交舊絶
10 三子獨見存
11 窮して交舊絶つものの、三子、独り存めらる。
12 勞耕同絶

我に東坡に従ひ、僥耕一雉を同じくす。
可憐杜拾遺、14事賜與朱阮論。憐むべし杜拾遺の、事朱・阮と論ずるを、
吾子計字夏、15四海皆弟昆。吾子計字夏、師とし、四海皆弟昆とならむ。

馬生は、本窮士、我に從ふこと二十年。日夜、我が貴を望み、買山の銭を分かたむことを求む。

毛を貴の上に割るに、何れの時にか成魁を得む。毛を貴の上に割るに、何れの時にか成魁を得む。我、反て君を果はし、借耕して茲の田を観む。

7 刮毛龜背、8 何時得成魁、9 可憐毛生癩、10 反て君を果はし、借耕して茲の田を観む。

9 何時得成魁、8 今反て君を果はし、借耕して茲の田を観む。

11 今反て君を果はし、借耕して茲の田を観む。今反て君を果はし、借耕して茲の田を観む。

12 施一當獲千。衆笑えども終ひに休む。一を施して千を獲に當る。一を施して千を獲に當る。
中國文學論集
第二十五号

次に，蘇軾に希望を齎したのは，該詩八首に登場する人々である。まず其一詩
6句，蘇軾は自分自身を孤
獨で過酷な状態にあると認識していたが，其二詩5句，6句「江南有蜀士，桑果已許乞」一
で，近隣の同郷人に桑の
実を分けもらうことになったこと，同詩11，12句「家僮饒枯草，走報晴井出」一
で，蘇軾の下僕が古井戸を見つ
けて報告したこと，さらに其五詩7，10句「農夫告我言，勿使苗葉茲」一
で，耕作について助言してくれたこと，其六詩9，12句「我有同合郎，官居在湯岳」一
で，蘇軾が自らの身を瀕
命を広げ，蘇軾に協力してくれる人々を誘う。そして其七詩で，自分に従ってくる
かけて同僚が大蜜柑を送ってくれたことをそれぞれ説く。

「吾師卜子夏，四海皆弟昆」と説い，「孔子の弟子である卜商（字子夏）がいうように，
世間の人々もと兄弟
のようにならう，そうすれば孤獨ではない」と，高く高く宣言するのである。この三
人の名は，馬井の人々である，
と兄弟のようにならうと言え，「吾師卜子夏，四海皆弟昆」を説き出す，馬生の援助を得て開運に至ったことに応じて，結果とす

さてここで，蘇軾に希望を齎した第三の点を考察するために，
視点を変ええて，
該詩の土台を構成するものから考
えてみよう。その土台とは，空腹である。其一詩11，12句で来，
「吾師卜子夏，四海皆弟昆」を導き出し，今後は孤獨では
ないと言えるであろう。それを受け継いで，
馬生の援助を得て開運に至ったことに対応して，結びとす

そののである。
言、得飽不飲忘”で結論を、其六詩11、12句「遠我三十里、
照座光卓棄」で大蜜桔を、其七詩11、12句で一飯を
それぞれ詠み、各詩が食物に関する内容となっている。それ故、飢えた者がひきに食物のことと思うようであり、
かつて中央官吏であった蘇軾ほどの人物が、流謫前と大きな落差のある生活を強いられていることが懸想される。
前述のように、天候が蘇軾に味方したことは、蘇軾にとって確かに有り難いことであったが、それは蘇詩の背景
にすぎず、主眼ではない。以上の主眼とは、孤獨な旅人か、身近な人から徐々に範囲を広げ、広く人々の協力を得て,
ついに世間の人々皆と兄弟のようなようになろうと宣言し、以後は孤獨ではないという喜びを表現したことがある。と
詩八首全体を通してその顕著な心が溶かしてゆく過程と結果にある。

「東坡八首」詩は、いかにも蘇軾の真贋さを表わす、代表作ともいうべき作品である。そこでは蘇軾は、
その温かな心が蘇軾、また、八首全體の構成上の締めくくりとして、彼八詩を叙文と対応させ、叙文で言及した馬生を再び登
場させ、さらに、其一詩の「一寸の毛を刮るも欲す」を受けて、其八詩で「毛を髪背の上に刮るに、何れの時
にか成観を得む」とユーモラスにい、詩人としての態度を取り戻し、単なる実腹の詩ではなくなしたところである。

「東坡八首」詩の鍵になるのは、前述のように其七詩の「孔子の弟子である卜商がいうように、世間の人々皆な
名もし、宗教に関するあり急な詩題であるにも関わらず、

「東坡八首」詩の鍵になるのは、前述のように其七詩の「孔子の弟子である卜商がいうように、世間の人々皆な
名もし、宗教に関するあり急な詩題であるにも関わらず、

「東坡八首」詩の鍵になるのは、前述のように其七詩の「孔子の弟子である卜商がいうように、世間の人々皆な
名もし、宗教に関するあり急な詩題であるにも関わらず、

「東坡八首」詩の鍵になるのは、前述のように其七詩の「孔子の弟子である卜商がいうように、世間の人々皆な
名もし、宗教に関するあり急な詩題であるにも関わらず、
おわりに

最後に蘇軾の生涯を通じて考えてみたい。

王水照氏は蘇軾を論じて、「儒教思想がその根本にあるが、在職時期に政治の発言をすれば、また政府に陥れされることを恐れて楽しい生活を送ったであろう。」と述べている。しかし、当時の人間であるとは、政治の発言をすれば、政府に陥られることを恐れて楽しい生活を送ったであろう。しかし、当時の人間であるとは、政治的立場では難しいも言えよう。

謝りに

（注）
蘇軾における『東坡』の意味（正木）
道不足以御氣，性不足以勝習。不鑑其本，而軋其末，今雖改之，後必復作。蓋歸誠佛僧，求一洗之。得城南精舍曰安善男子。一切障礙即究竟覺。得念念無非解脫。成法破法皆名涅槃。【中略】地狱天宫皆为净土。

【大方广圆觉修多罗了义经】

（与王定国四十一首其八）

姚簡範主编《宋代文化史》

【宋史】卷十五

神宗本纪（熙宁七年春正月）

庚子，幸集禧觀宴从臣，又幸大相国寺，御宜德门觀燈。

初到、一見太守，自餘杜門不出。故人馬正卿哀余之貧，爲於郡中請故舊地數十畝，使得躬耕其中。地既汚荒，爲茨棘瓦礫之場，而歲又大旱，穀物之勞，筋力殆盡。释而復興，乃作是詩，自感其勤，庶幾來歲之入，以忘其勞焉。